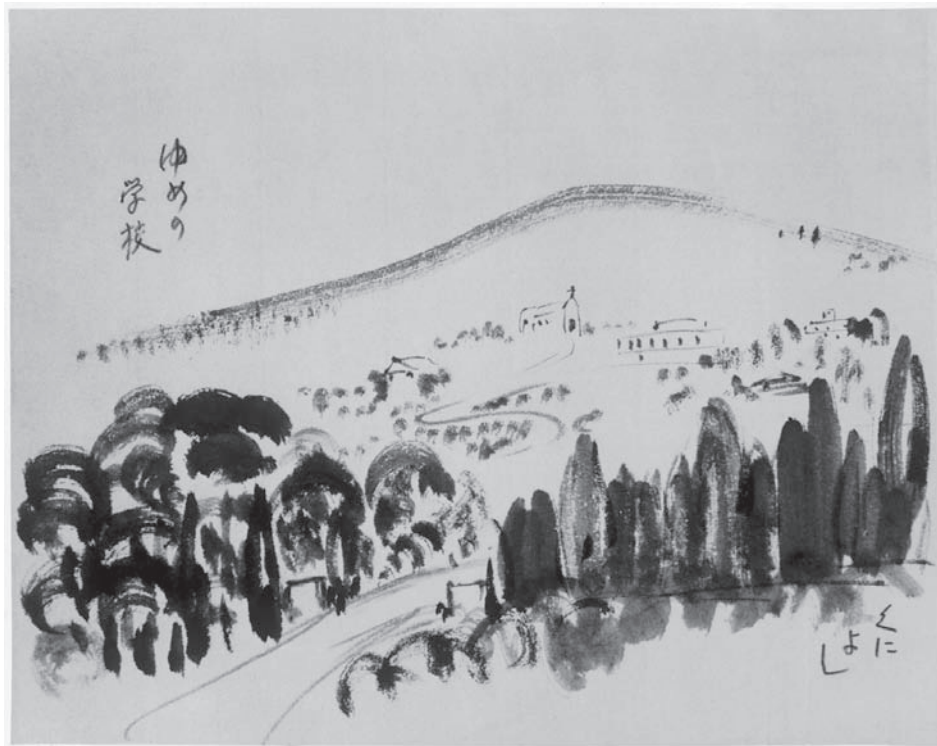


ゆめの学校

本学園は、創業者・小原國芳の「果てしない夢への情熱」により誕生しました。



創業者小原國芳が描いた玉川学園

1929年（昭和4年）、玉川学園は誕生した

1919年（大正8年）、沢柳政太郎博士の招聘により、当時、広島高等師範学校附属小学校理事（教頭格）の職にあった創業者・小原國芳は、牛込にあった私立成城小学校主事を務めるために上京。成城小学校の発展に心血を注ぎ、成城教育拡張のために砧村移転（現成城学園）にはじまり、旧制七年制高等学校および高等女学校設立という教育事業を達成します。そのころ、創業者自身の教育理想、構想のいくつかは実現できたものの、「マコトの教育」への欲求は抑えきれないものとなり、自身の教育理想を追い求め、1929年（昭和4年）に財団法人玉川学園を設立し、小学校・中学校を設置しました。これが、本学園の誕生です。

創業者は後日、雑誌『教育問題研究』（1930年〈昭和5年〉1月号）の中で「新しく玉川学園が生まれたわけ」として、「全人教育の立場からホントの真を掴み、ホントの善を経験し、ホントの美しさを理解し、聖の世界のわかる人間を育成せんがために他ならぬ。さらに飲んで困難と闘い、人生の一番辛い損な場面をも率先して引き受け、国のため、社会のため、人類のため捨石となり土台となり得る真人間、不屈不撓の精神に燃ゆる真男児を育てんが為であり、（中略）」などと本学園を生んだ概念を表しています。

学校ができ、街が生まれた

大正後期、理想的な勉学環境を求め学園都市が相次いで生まれました。本学園は何もない多摩丘陵に教育的好環境を求めました。まず、学校があり、それを中心として教師や学生の住む教育環境的な町並み、そして、文化性に富んだ町が周辺に広がっていく「理想の学園都市」が生まれました。適度な起伏が町並みにアクセントを加え、生徒や学生たちの賑わいも学園町の一部に溶け込んでいきます。玉川学園の町は、学校開発と同時に住宅地の開発も行われ、学びを中心とした文教地区を自らが作り上げました。開校当初から開業された駅の効果もあり、学校建設と土地経営が相まって、学園都市として大きく発展をしました。

学校を中心に広がった街並みは、文化的な香りのするものとなりました。学校と街並みが一体化した雰囲気醸し出しています。

学校が行っている学園祭や博物館の活動、演奏会や、演劇公演には多くの近隣住民の方々が来園されています。こんなところも、学校から生まれた町の良さとなっています。

学校名、地名、駅名、すべて「玉川学園」

本学園開設当時の住所は「東京府南多摩郡町田町本町田」でした。1929年（昭和4年）の開校時には学校名「玉川学園」、駅名小田急線「玉川学園前」、そして1967年（昭和42年）の表示改正により住所も「町田市玉川学園」となり、日本で唯一の学校名、地名、駅名が同じ「玉川学園」ができ上がりました。

開校に合わせて「玉川学園前駅」が開業

小田急線が開通して2年後、本学園の開校に合わせて玉川学園前駅が開業されました。乗降客も予想もつかない状況での開業、まだ学校しかなかった当時、電車を玉川学園前駅に停車してもらうため、駅舎の寄贈と売り上げの最低保証をしておいた玉川学園前駅の開業でした。現在では毎日の乗降客が約4万9000名にも上る駅になっています。

Column

夢



玉川学園で見る「夢」の文字は少し変わっています。「夕」の部分に1画多くなっています。

創立者・小原國芳は、1画多い夢の文字を書くことに、他人より1つでも多く夢をもてという願いを込めていました。「私の最も好きなことばは、Vision（幻）ということばと、Dream（夢）ということばである」と書き残しているように、生前最も多く書き残した書の一つが、この1画多い夢の文字でした。

この文字は、玉川学園の校章などとともに、特許庁よりサービスマーク・商品商標としての許可も受けています。